

パネル発表「心を育てる教室飼育システム」

鷺見辰美

1 モルモットとの出会い

モルモットと出会うが、これまで抱いたことがない子がほとんどであり、そうじをするにも一苦労の状態になる。獣医師さんにモルモットについて説明してもらって、ずいぶんいろいろなことが分かって、すぐに世話がスムーズになるというわけにはいかない。そこで、2年生からモルモットの抱き方を教えてもらう。

この時に、全く触ることができない子がいた。このとき、2年生の子は無理に近づけようとしなくて、この触れない子が抱くことができるように工夫してくれた。

- ・別の1年生の子に抱いてもらい、安心していいんだよということを伝える。
- ・タオルを用意してきて、直接触れなくてすむようにする。
- ・まずは、えさや水をあげることをやってみることで、そのかわいしぐさを見て抵抗感をなくすようにする。

2 モルモットと共に育つ

結局、この子はそのときに抱くことができなかつた。それでも、1, 2, 3年生と、週末家に持ち帰るうちに愛着をもてるようになるようになってきた。それが持ち帰りノートの言葉にも表れている。長期や週末の休みには順番に家に持ち帰る。このときに、モルモットに対する愛着感がぐっと高まる。体重測定したり、等身大の模型を作ったり、えさの好みを探したりして密着した数日間になる。協力的な家庭では、家族でモルモットが家に来ることを楽しみにしている雰囲気を作ってくれることもある。

当然、様々な理由で家に持ち帰ることができない子もいる。その子たちも順番は回ってくるが、自分で他の友達にお願いするようにする。責任をもつためである。日常の世話がアレルギーでできない子も、自分なりにできることは何か考えて行動できるように指導していく。

3 モルモットの抱き方を教える

3年生になり、今度は1年生にモルモットの抱き方を教える機会が生まれた。ぎこちない抱き方をする1年生に教える姿は、自信に満ちあふれている。いきなりモルモットを抱くことは難しいのではないかと考えた子どもたちは、模型を用意したり、紙芝居を作ったりして分かりやすい説明を心掛けていた。



くある子どもの観察日記より 8月20日>

モルちゃんをあずかるようになって3回目の夏休みです。初めはすごくこわくて、さわれなくて、新聞紙を取りかえたり、お家を作ったり、えさをあげるのもこわくて、お母さんやお兄さんに助けてもらっていました。

でも、今年は気がつくとも、自分で全部取りかえたり、えさをあげたり、少しモルちゃんがさわいでも全然こわくなくなっていました。それはなれたこともあるけれど、一番私がかわったと思ったのは、1年生にモルちゃんのお世話の仕方を教えたことだったと思います。本当はこわいと思っても、「自分でやれる」と思えばできることだから、お姉さんらしく1年生に教えようと思いました。その時から、モルちゃんに対して心があたたかくなつたと思います。

今は、まだだっこができないけれど、モルちゃんに話しかけたり、何にもわからないので、モルちゃんが赤ちゃんにみたいに思えたりするので、とてもかわいいと思えるようになりました。9月にまたすぐあずかれるのでうれしい気持ちです。やればできる！

4 モルモットの死

ある朝、一匹のモルモットがすごく弱っていることに子どもが気づいた。そのまま、獣医師さんにも診てもらったが、その日の夜に死んでしまった。次の朝、心配しながら登校した子どもたちは、モルモットの死を知って大泣きしながら埋葬した。死は飼い始めに、ためらう一因になる。しかし、限りある命を実感する体験は、何にも代え難いことを保護者にも子どもにも理解してもらう努力をしたいものである。

(筑波大学附属小学校 教諭)